

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：13901

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K23221

研究課題名（和文）在日難民のその人らしく生きること：背景・価値観・文化に着目したエスノグラフィー

研究課題名（英文）An Ethnographic Exploration of Culture and Values among Refugees in Japan

研究代表者

中島 麻紀（NAKAJIMA, MAKI）

名古屋大学・医学系研究科（保健）・助教

研究者番号：40877065

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：在日難民の価値観や文化が尊重され難民自身が希望する生活，すなわち「その人らしく生きる」とはどのようなことかを明らかにするために、在日難民14名へのインタビュー調査及び難民コミュニティにおける参与観察を行った。分析の結果、5つの主要なテーマ、「その人らしく看取られる」、「自分の文化を安心して守ることが出来る」、「信念の場所がある」、「周囲の人や日本社会から認められる」、「難民としてではなく1人の人間として家族と共に平和な生活を送る」が導き出された。日本における難民の看護モデルに必要な要素として、安全な場所の提供、対等な立場での関わり、複雑な背景の理解、文化的に配慮した終末期ケアの提供が考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在日難民を対象とした看護研究は非常に限られてる。本研究は、難民のその人らしく生きることに関与する視点から着目し、難民自身の声を明らかにした。本研究知見は、対象者理解及び在日難民の目線に立った看護ケアモデルの構築に繋がる実践的なものである。近年ウクライナからの避難民の受入れも行っており、難民条約加盟国が少ないアジアにおいて、日本における難民を取り巻く現状を発信する意義は大きい。難民への医療・看護システムの構築は重要な課題であり、課題解決に繋がる研究であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to extract the elements necessary for refugees to live their desired lives. This ethnographic study included online and face-to-face interviews and participant observations, conducted between September 2020 and October 2022 in the Indo-Chinese refugee community in Japan. Study participants included 14 refugees. Five major themes emerged: 1) having a place of belief; 2) receiving recognition from people and society; 3) protecting their own culture; 4) receiving culturally respectful end-of-life care; and 5) living a peaceful, settled life with their family as a person, not a refugee. The following elements of the nursing model for refugees in Japan were derived: providing a safe place, being involved on an equal footing, understanding complex backgrounds, providing culturally sensitive end-of-life care, building trusting relationships (feeling safe to speak up), and respecting the patient as an individual.

研究分野：国際災害看護学

キーワード：在日難民 その人らしく生きる 文化 看取り 難民コミュニティ 看護ケアモデル エスノグラフィー

1. 研究開始当初の背景

日本における難民への看護ケアの必要性

現在世界で 108 人に 1 人が難民及び国内避難民、庇護申請者である (UNHCR, 2019)。日本は、アジアでは数少ない難民条約加盟国として期待される役割は大きい。難民は言語や文化、制度の障壁により医療やケアへのアクセスが不十分である (ICN, 2018)。看護職者は、難民が制度や言語、文化的障壁を乗り越える手助けをする重要な役割を果たす。海外において、米国では精神疾患を持つ難民への訪問看護、英国では難民の健康ニーズ評価といった専門の看護サービスが数多く存在している。先行研究では、看護職者が難民の経験を共有すること (Simich, Beiser, & Mawani, 2003) や、難民自身の言葉を受け入れること (Davenport, 2013)、難民と看護職者の文化的な認識の相違を埋めること (Grigg-Saito et al., 2010) といった難民の価値観や文化を尊重した看護ケアの重要性が示されている。しかし、日本では難民への看護サービス自体が整っていないのが現状である。そのため、在日難民の複雑な背景や難民自身の声をまずは把握したうえで、日本式の看護ケアモデルを構築することが必要である。

難民のその人らしく生きること (難民の価値観や文化) に着目する理由

難民は安全や尊厳を脅かされ恐怖や飢え等を経験し、その経験はウェルビーイングに悪影響を与えている。本申請者の在日難民を対象とした研究 (中島, 2020) において、ウェルビーイングとは自分らしく楽に生きることや人と関わり日本社会に認められることであり、自分たちの事を知って欲しいといった想いや、難民と支援者、日本社会との相互理解の重要性が明らかになった。難民への看護ケアには難民の経験や生活の理解が重要となる。そこで本研究の第一段階としては、難民自身の価値観や文化、再定住地での希望する生活、すなわち「その人らしく生きること」とはどのようなことか、に着目する。本研究結果は日本ではマイノリティといえる難民の対象者理解を助ける知見となる。その知見をもとに構築する文化的に妥当な看護ケアの提供は厳しい環境下で生活する難民の尊厳を守ることに繋がるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、在日難民の価値観や文化が尊重され、難民自身が希望する生活、すなわちその人らしく生きることとはどのようなものかを明らかにし、在日難民がその人らしく生きることに必要な要素を検討することを目的とする。本研究知見を基盤とし、在日難民の文化的に妥当な看護ケアモデルの構築を目指す。

3. 研究の方法

研究デザイン：エスノグラフィー

Spradley (1979) の発展的研究過程を参考に以下の手順で実施した。

- (1) 情報提供者にインタビュー、
- (2) 記録の作成、
- (3) 記述的なインタビュー、
- (4) エスノグラフィーによるインタビューの最初の分析、
- (5) ドメインを抽出するための分析、
- (6) 構成的なインタビュー、
- (7) 分類学的な分析、
- (8) 比較対照的なインタビュー、
- (9) 構成要素を抽出するための分析、
- (10) 文化的テーマの発見、
- (11) エスノグラフィーの記述

対象者：在日インドシナ難民定住者及びその家族

対象地域：神奈川県インドシナ難民の居住地

調査期間：2020年9月～2022年10月

4. 研究成果

在日難民 14 名を対象にオンライン及び感染対策を十分に行い対面でのインタビューを実施した。分析の結果、在日難民のその人らしく生きることの要素として、5 つの主要なテーマが導き出された。

【その人らしく看取られること】

参加者は母国を恋しく思うも、家族がいる日本に残りたいと考えてた。在日難民は、自分たちの国の伝統的なスタイルで葬儀ができることに安心し、それによって情報を共有できるコミュニティのつながりが生まれると考えていた。

【信念の場所があること】

参加者はよく場所について語った。仲間たちと過ごすための安全で安心な場所を持つことが在日難民にとって自分らしくあるために必要であった。

【自分の文化を安心して守ることが出来る】

参加者は、自分たちの文化を守り、日本文化を理解することが重要であると考えていた。在日難民は、定住後徐々に日本文化を理解し、自分たちの文化だけでなく、定住した土地の文化との共存を目指していた。

【周囲の人や日本社会から認められること】

参加者は自分たちの生き方が人々や社会に認められることを望んでいた。在日難民は、日本人と同じように、税金を払っているにも関わらず、子どもたちの将来の機会が奪われるのではないかとということや国籍について問題であると認識していた。

【難民としてではなく1人の人間として家族と共に平和な生活を送る】

参加者は難民ではなく、1人の人として尊敬され、普通の人々として生活することを望んでいた。在日難民は自分たちが難民であるということを徐々に意識しなくなっている兆候が見られた。

以上の分析結果より、在日難民にとって、自分たちの文化様式で葬儀ができること、日本社会で自分たちの文化が理解され安心して過ごせること、信仰の場として心安らく場所があることなどが重要であった。在日難民の高齢化に伴い、看取りという要素が抽出された。難民を対象とした文化的に妥当な看護ケアモデルの構築に向けて、文化固有の病の意味付けや看護ケア方法の探索、看護職者と難民との相互理解の必要性が示唆された。

<引用・参考文献>

- Burchill, J., & Pevalin, D. (2012). Barriers to effective practice for health visitors working with asylum seekers and refugees. *Community Pract*, 85(7), 20-23.
- Davenport, L. A. (2013). Living with the Choice: A Grounded Theory of Iraqi Refugee Resettlement to the U.S. *Issues in mental health nursing*; 38 (4), 352-360.
- Grigg-Saito, D., Toof, R., Silka, L., Liang, S., Sou, L., Najarian, L., . . . Och, S. (2010). Long-term development of a "whole community" best practice model to address health disparities in the Cambodian refugee and immigrant community of Lowell, Massachusetts. *American journal of public health*, 100(11), 2026-2029.
- 原口律 (2001). インドシナ定住難民の社会適応 : サポート・システムの分析を基軸として . *人間科学共生社会学*, 1, 1-47 .
- 五十嵐ゆかり (2014). 日本における難民女性のリプロダクティブヘルスの現状 . *日本助産学会誌*, 28(2) 250-259 .
- International Council of Nurses: ICN (2018). Health of migrants, refugees and displaced persons.
- Muecke, M. A. (1992). Nursing research with refugees. A review and guide. *Western Journal of Nursing Research*, 14(6), 703-720.
- Simich, L., Beiser, M., & Mawani, F. N. (2003). Social support and the significance of shared experience in refugee migration and resettlement. *Western Journal of Nursing Research*, 25(7), 872-891.
- Spradley J.P. (1979). *The Ethnographic Interview* (1st ed.), Wadsworth Group, USA.
- 鈴木美奈子 (2003). 難民経験と世代間関係 在日カンボジア家族の事例を中心に . *年報社会学論集*, (16), 52-64 .
- Sullivan, C. H. (2009). Partnering with community agencies to provide nursing students with cultural awareness experiences and refugee health promotion access. *Journal of Nursing Education*, 48(9), 519-522.
- 瀧尻明子, 植本雅治 (2015). 在日ベトナム人高齢者の生活と健康状態に関する研究, *大阪市立大学看護学雑誌*, 11-20 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Maki Nakajima, Ikumi Honda
2. 発表標題 An Ethnographic Study of Refugees in Japan: Elements Required to Develop a Culturally Appropriate Nursing Care Model for Refugees.
3. 学会等名 第37回日本国際保健医療学会学術大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------